
永久の光 ～失くした記憶～

星河 翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永久の光　く失くした記憶く

【Nコード】

N9650D

【作者名】

星河　翼

【あらすじ】

記憶をなくした少年。何故か水の中で目覚めた。気付くと、浮上しそこは、泉であった。泉の周りでは、少女達が舞踏会を水面上で行われていた。しかしその少女達も記憶が無い。自分たちは何者なのか？それを知る為に、少年と、一人の少女は泉のほとりのお城へと足を向けるのであった。

#1 出逢い

中途半端な浮遊感が、俺の身体を包み込んでいる。いや、周りが水なのだと感じ取る事ができた時、今自分が置かれている状況をやっと把握した。

水に沈んでいるが何故か苦しくは無い。口からボコボコ息が漏れているのにも係わらず何故か苦しくないのである。だけど、このままの状態で居る訳にはいけないのではなからうかと感じ取れた時、重たい目蓋を開いた。

すると水上からの金色の光が目に入った。

その光は、キラキラと水の中で煌いていて、何故か心地が良く、俺は思わず吸い込まれるかのように、この水の中から体が浮上していくのを感じ取った。

浮上して、俺は、水面に身体を横たえていた。そうまるで、背中に吸盤でもあるかのごとく。それはピタリとそこで止まった。

「あの光は、これだったのか……」

横たわって見上げたままそう一人ごちた。が、何故かその光の主の名前が判らない。青白く、そして、丸い物。それが黒い空に浮かんでいた。でも自分の身近に感じられていたはずなのに、全くその名前が思い出せないのである。

そんなことを考えていると、この水面のどこから、音楽が聴こえて来るのに気がついた。それは、民族音楽のような、独特な聴き慣れない音楽だった。

俺は、その音楽が何なのか？ 気になって思わず、視線をそのままそちらに向けた。

そこには、白いサテンのドレスを着た少女達がハープや、管弦楽器を携えかき鳴らし、または唄を歌いながら、水面に輪を描くように跳ねるかのごとく踊っていた。

俺は、思わず、その光景を微笑ましい物に思い、見入ってしまった

た。

その奥には、白くて淡い光を放った大きなお城が見える。それがとても幻想的だった。

「これは、舞踏会かな？」

俺は、また一人ごちた。

すると、少女達が、俺の気配に気がついたのか？踊っているそのままの勢いで水面を跳ねるようにこちらへと足を運んで来たのである。

「あなた誰？」

一人の透き通るような白い肌の頬に少しソバカスが有る少女がしやがみこんで俺に問いかけてきた。

「え？俺は……」

と言いかけたところで言葉に詰った。

考えてみれば、自分が誰なのか？その事が判らないのである。

「誰？」

その隣の少女が、追い討ちをかけるように同じく問いかけてきた。

「え……と。判らないんだ……」

記憶喪失？なのかも知れない。

「そう。私達も自分が誰なのか？判らないの。同志ね！」

少しやせ細った少女が俺の顔を見下ろしてそう言って笑った。

「君達も自分が誰なのか、判らないんだ？」

俺は、起き上がりながらそう問いかけた。それを助けるかのように、一人の少女が手を貸してくれた。

「知らないやいけないことなのかしら？」

「そうなのかしら？」

「やっぱり知っていた方が良くかも知れないわ？」

複数の少女達がそう言って、ワラワラと俺の所に集まってきて騒ぎ出した。周りに流れていたはずの音楽も止まった。しかし、
「そうかしら。知らない方が良い事も有るかも知れないわよ」

一人の少女が、まるで傍観視でもしているかのように、水面から離れた草の上で、白いドレスを腕で抱き込むかのようにして座り込んだままそう言ってきた。

ふわふわ巻き毛の黒髪と、白く透き通った肌が対比的で青白い光の下かなり魅力的に感じられた。

でもその容姿のわりにかなりさばけてる所がまた、小憎らしい気もする。だから、

「じゃあ、自分が誰なのか？調べよう！」

俺は提案した。

「知らない方が良くかも知れないのに、調べるの？」

少女は、立ち上がって、俺の方へと歩み寄った。というか詰め寄ってきて、俺を見上げるかのようにつま先立ちをし、ジッと見上げた。

まるでガンを付けられてるかの様に感じ、俺は、一步退いた。

「な、何だよ？」

「あなた、自分で言うておいて、何を怯えているのよ！そんな事で、自分が誰なのか知りたいの？」

ぷつと吹き出しそうな表情で俺を見上げた。怯えてる訳では無い。ビックリしたんだ！と言ってしまったおうかと思っただけと止めておいた。

「じゃあ君も、自分が誰なのか？調べようよ！君は怖くないんだろ？」

「な、何よその言い方！こ、怖くなんか無いわよ！なら、一緒に自分が誰なのか？調べる？多分あのお城に、全てを知る鍵が有ると思うわー！」

少女は、そう言うてお城のある方角を指差す。此处、泉のほとりを取り巻いている森の中にあるお城。白くボーッと光っている幻想的だなと思った、あのお城だった。

「あそこに行けばわかるというその根拠は？」

そう、何故少女はそう思うのか？

「あのお城、私達が起きている間は在るけど、寝てる間に消えるから。不思議じゃ無い？」

じゃあ何か？神出鬼没なお城という訳か。それは確かに奇妙だ。

「了解！なら今すぐ出発だ！」

俺とその少女は、他の少女達の、止めなよ。と言言葉で大丈夫だから！と言つて、その場を離れた。

森の中は、あの光も遮断するくらい生い茂っている。なので、暗闇を歩く事となる。が、少女の体が仄かに白く光っているのと、何故だか自分が発している仄かな光で道を見誤る事は無い。

「何故君は光っているの？」

「それを言うなら、あなたもでしょ？」

言ってるそばから、二人とも疑問符で留まる。どうも、息が合わないコンビだ。きつと、少女もそう思っているに違いない。

俺と少女は、言葉少なげにその森の中をズンズンと進む。眼前に聳えるお城を目指して。

そんな時、歩を進める先の草むらから、オレンジ色に光る四つの鋭い光がこちらを見ているのに気が付いた。

「キャッ」

少女は、お化けでも見たかの様に、俺に飛びついてきたのである。俺は少し照れてしまった。

「驚かなくても大丈夫だよ。あれは、狐の瞳だよ！」

俺は、必死でしがみついてくる少女に、言い聞かせた。

「狐？それは何？あなたは知っているの？」

「君は知らないの？」

「知らないわ。あなた、変わっているのね。自分以外の事は、言葉や物を知っているなんて！」

考えてみれば、変かも知れない。でも、キミだって、知っている事と、知らない事が有るじゃないか？

そんな事を思っていると、サクサクと二匹の狐がこちらに近づい

てきた。一匹は、子狐のようである。

「あら、あなた達、あのお城に行くのかい？」

「どうやら、母狐のようである。」

「はいそうですが、何か有るのですか？あのお城に？」

俺は、問い返した。

「噂に聞いた所によると、入ったら最後、出られない。って事らしいよ？噂だから、本当かどうかは判らない事だけれども。それでも、行きなさるのかい？」

母狐はそう言った。

「うん。行つて確かめないといけないんだ。あそこに、自分が何なのか？それを知る鍵が有るらしいから！」

少女から聞いたままの事、俺はそう言った。

「お姉ちゃん、それで良いの？あのお城、朝には消えて無くなるよ？」

子狐が問いかけてきたのを、

「そうなんだけど、まあ……そう言う事だから、仕方ないのよ。負けられないしね、この人に！」

って、いつの間に勝負してるんだ俺達は？顔が引き攣りそうになったけど、俺達は、その狐の親子に「さようなら」を言つてその場を後にした。

「あのさ、俺達、いつから勝負してるんだ？」

「あなたが、そう思ってるからでしょ？」

「そんな事思つてないぞ。俺は！」

「あらそう？じゃあ、良いじゃない。私は、そうなのかと思つていただけ？」

「先に、突つかかつてきたのは君じゃないか！」

「そうだったかしら？忘れたわ」

いけしゃーしゃーと話す唇がピンク色に染まっついて印象的だけど、やはり何か気に入らない。こうして話の噛み合わないまま、俺

達は森の中へとさらにズンズンと進む。

お城がだんだんと近くなってきた様に感じられた。あと少しすると、お城の城壁まで辿り着けそうだ。そんな時、

「おい、お前達、お城に行くのかね？」

ひよっこり顔を出したのは、山羊のお爺さんだった。

「はいそうですか」

俺は、頷きながらそう言った。

「何しに行きなさる？」

「自分が何なのか？それを探りに行くつもりなのよ」
今度は、少女が応えた。

「ほほ」記憶を失くされたのか？なら伝説ですと、地下にある、七色の宝石を持ち、最上階にある王冠にその石を埋めると良い。そうすれば、自ずと見えてこよう」

「そんな伝説が有るのですか？さっきの狐の

母親は、生きては還れないと言っていたけれど？」

俺は問い返した。

「まあ、行つて見るとその意味も判る。それでも行きなさるのか？」

山羊のお爺さんは、意味ありげにチラリと俺達を見て、そしてほつぽつぽと笑った。

「そうすることに意義が有ると思つたから行きます！」

「なら気をつけなされ。光には、闇が付き纏うと言つ事を忘れずな？」

山羊のお爺さんは、忠告だけして草むらに駆け込み去つて行つた。

「どういう意味だろう？な？」

「そんな事知らないわよ。それでも行くのでしょ？もう怖くなつた？」

少女は、あつけらかんと言つた。怖くないのだろうか？とも思つたが、此処で引くのも何だか男らしくないので、

「冗談だろ？行くに決まってる！」
俺は、強がってそう言い切ってしまったのである。

#1 出逢い（後書き）

短い作品ですが、お付き合い頂けるとありがたいです。

#2 城と唄

闇は、光に懂れて、光は闇を宥めるが、その先は空と海のように交わらない。

ついに城壁のある、門の所までやって来た。

歌声が聴こえる。否、歌声なのか？どちらかと言うと、言霊？
唱えている様な声が聴こえてきた。

「あの声は何かしら？」

少女は、少し薄ら寒そうな声色をして、俺に問いかけてきた。でも、俺にもそれは判らない。

「城の中から聴こえてくるな？」

さっきの狐の言葉を思い出して、俺まで身震いしそうな気分だった。

俺達は、お互い顔を見合わせながら、薄ら笑いをした。それは、怖くないぞこのやろう！って奮い立たせる為の、作り笑い。お互い判ってはいるが、追求する気にはなれなかった。

「とにかく門の中に入らなきゃな？」

嚴重に閉まっている門。これを開ける事が出来るのであろうか？と思わせる程、俺達のはるか頭上まである高さの重厚な門である。

「こういう時、何か唱えないといけないのかしら？」

少女は、言った。

「開けゴマとか？」

「何それ？」

「知らないのか？」

「知らないわよ」

あっさり言い切られて、俺はから笑いした。

「んじゃ良い。あるお話の呪文だよ」

「そう。知らなくても生きてはいけるわね」

可愛くない！返事に一々腹を立てても仕方ないので、俺は、門の扉に力をこめて開けようとした。がしかし、寸とも動こうとしない。

「キミも手伝えよ！」

「か弱い私が力入れても開くわけないでしょ？」

「やってみてから言えよ！この、天邪鬼！」

俺は、終に力チンと来てそう言った。それに対して怒ったのか？少女は、

「手伝ってください。と言いなさい！」

って、それは何ですか？命令かよ……まるで召し使いの様に扱われて、俺はムツとした。その為、門を脚で蹴り飛ばした。でも、開くわけが無い。

「なあ、真面目に手伝ってくれないか！」

「それは、力を貸して欲しいと言う事よね？なら、素直にそう言えば良いじゃない？」

「だから、初めから言ってるだろう！」

「はいはい。判ったから、そうやって怒るの止めてくれないかな？」

少女はプププと含み笑いして俺に言った。

こいつは、俺を何だと思ってるんだろう？只からかっているだけなのか？全く！でも、怒るのも力を使うので止めにした。肩を下ろしてリラックスリラックス。

「じゃあ、押すよ！せえのー！」

と言う感じで二人してその門を押した。

するとどうだろう？あの開くはずも無かった門がズズズッと開いたのである。

少し開いた所で、俺達を通れるだけのスペースを作り出したので、中に入り込む。

中に入ると、白い花で埋め尽くされた、ガーデニングと、お城の階段へと繋がる道に出た。道は、白い蠟燭で整った炎で揺らめいて

いた。

「さて、行くとするか！」

俺はそう少女に言っと、後ろに居るはずの少女を見る為に振り返った。が、その後ろにあるはずのもんが綺麗さっぱり消えてしまっていることに気がついたのである。

「おい！門が無いぞ！」

「あら、本当。ビックリね」

少女は言葉こそ驚いた。と取れるが、表情からは余り驚いた風も無い。驚いてるのは俺だけであつた。

「何をそんなに落ち着いてるんだ？在った物が無くなったんだぞ！」

俺は、少女の肩を揺すった。

「気安く触れないでくれない？ちゃんと驚いてるわよ。でも、何があつてもおかしくないでしょ？だってこのお城消えるんですもの」

あ、そう言えばそうだった。消えるお城なのだったと諭された事に、自分で拍子抜けしてしまったのである。

「とにかく進みましょう？それが目的なのだから！」

真っ直ぐお城を見据えている少女の姿に、狐に驚いたあの時の少女は此処には居ないと悟った。此処に居るのは、好奇心の塊の少女なのだとやっと気が付いた俺であつた。

お城の階段を上る。回りの蠟燭の炎が、俺達の歩調に合わせて揺らめいていた。それがまた、踊ってるかのように凄く印象的に瞳に映る。

この階段を上り切ると、そこにはお城の玄関の扉に当たる。

俺達は黙々とその階段を上った。少女は一体何を考えているのであろうか？俺は不思議でしようがない。足取りはとても軽く見える。あの泉の水面を駆けるかのごとく。

そして、何事も無く、扉の前に立ちはだかった。

「ごきげんよう。いらっしやいませ、お客さん」

扉はいきなり口を開いた。その合図で、扉が開かれた。中は、外からのイメージ通り幻想的な造りをしていた。あらゆる家具は、生活感の無い無味無臭さをもし出し、誰も住んでないのではないだろうかと思わせるそんな感じがした。そして、白くボーッと光る壁。それが、シャンデリアの光と融合し、より幻想的だった。

俺達は、山羊のお爺さんに言われた通り、地下を目指す。

「階段を探さないかね？」

俺は少女に言った。すると少女は、珍しく俺に同意した。

「それが先決よね？でもこの広いお城の何処に階段があるのか？それを探すのが一苦労じゃない？」

確かに、高い天井に圧倒され、そしてこの幻想世界の中に居るだけで、何だか落ち着かない。だから、余計このお城の構造と言う物が理解できなかった。

「二手に分かれる？」

「いや、分かれて探すのはどうかと思う。きっと、迷子になるか、落ち合えないか？のどちらかだよ」

「全く気が小さいわね」だけど確かに、迷子になりそう……ね。なら、このお城の中から聴こえるあの声を頼りに探しましょう」

そう言えば、ずっと聴こえていた声が、お城の内部に圧倒されていたため今まで気にならなかったけれど、考えてみればそれが一番なのかも知れないと思う。

「判った、そうしよう。でも、それで良いのか？疑問は残るけれどもね」

「だけど、此処で何もしないよりかマシだわ。だって、口を銜えて此処に居るなんてバカみたいじゃない？」

なんとという前向きな発言。それも一理あるのだけど、本当にこの少女は前向きだ。自分が何なのか？それを知った時もこう言う言動が出来るのであるのか？俺には疑問だった。

「判ったら、さっさと行くわよ！」

その言葉に有無を言わせない何かを感じて俺は、情けない事に、

少女の後を追ったのである。

通路を歩く。不思議な事に、このお城は、人が辿った通路の床に紅い印を付けるといふ変わった趣向がなされるみたいだ。それが迷わない一つの道標みたいな物。

「ちよっと！そこはさつき辿ったでしょう？全く観察力が無いんだから！」

その言葉で、俺は初めて気が付いたんだけれども。

そんな訳で、声を頼りに少女の歩に合わせて歩く。すると、歩く半ば或る所から、いきなり雰囲気の変った通路に出た。そして立ち止まる。そこは、まるで、闇を思わせるほど暗い廊下であった。

「まさかここから先に階段があるとも思ってる？」

俺は問いかけた。

「だって、変じゃない？此処だけ他と違うなんて！」

興味が先走りしているみたいだった。

「でも、『光には闇が付き纏う』と、あの山羊のお爺さんは言っていたじゃないか？やめた方が良いと思うけど……」

此処に来て怖くなった。何故だろう？この先に何かとんでもない危険が潜んでいそうだ。

「ゴチャゴチャ言わない！そんな事で、どうするのよ！地下にある宝石をとってきて、最上階の王冠に埋め込めば良いだけの事でしょ？この先に何が有ろうと、怖がるような事じゃ無いじゃない！本当、それでも男なの？」

と言って、少女は、一気にその通路へと駆け出した。仄かな白い光が暗闇の中に、俺の前からスーッと去っていく。俺はそれを見失う訳にはいかないと駆け出した。

「何てこと無いじゃない。ただの暗い廊下よ！」

少女は、ケラケラと軽く笑った。

「だけど、それだけじゃ無いんじゃないのか？ここは、腐臭がするし、ちよっと変だ」

といったそばに、俺は何かに躓いた。

それは、何かの白骨であつた。

「ちよ、まずいよこれ……何か異様だ。引き返さないか！」

しかし、少女は、なんとも思つてないらしい。

「無様ね……」

と、その白骨に向かつてただボソリと呟いた。

「おい！そんな風に言うなよ！もしかすると、こう言う事に俺達になるかも知れないって事だぞ！」

俺は、少女に対して怒鳴つた。そんな言い草つて何だ！と言うのも念頭にあつたのだ。

「危険である事を承知して入つたのでしょ？それは自分に力が無かつた。只それだけの事だと思つて。何？あなたもそれを肝に銘じているんじゃないの？見損なつたわ」

少女は、立ち止まつたその場を、サテンのドレスを翻して前を向いて歩き出した。

判っているさ。でも、言い方というものがあるだろう。俺は、まだ納得行かない頭のまま少女に付き添う。それが俺の弱さだと自分で何となく判つた気がする。

それからどのくらい歩いただろう？光と闇が廊下を横切つて、縞々の帯のように行く手に立ちふさがつた。

「何だろう。これ？」

俺は、その光を触ろうとした。すると、手が、紅く染まつた。染まつたというより、ただれたと言う感じだ。でも、痛みは無い。

「きつい紫外線？なのかしら……私は、これに触れられない……」

少女は、そう言つて、そこに立ち尽くした。

「紫外線に弱いのか？キミ……」

「そうよ。私達は夜活動して、朝には寝るもの」

この少女は、自分のバイオリズムに関してはきちんと把握してるらしい。俺は、そう言うことが判らないというのに……

「判った。なら、俺の背中のマントの中に入っている。女の子の身体に痣など作るのは可哀相だ……」

怒っていても、庇いあう事くらいは出来る。俺はそこまで非情じゃ無いつもりだ。

「借りが出来るわね？」

「勘違いするなよ。借りとかそんなんじゃない。助け合いってやつだ」

俺は、背中の白いマントを肩の止め具から外すと、少女の全身に被せた。そして、少女を抱えると、一気にその通路を猛ダッシュ。カンカンと駆ける靴の音とあいまって、あの声が轟く。地下へ下りる階段が近いと言っことなのか？俺は、軽い少女の身体を抱えてそう思った。

#3 コンビネーション

その通路を通り過ぎると、俺は少女を下ろし、マントを元に戻した。

「顔、真っ赤ね……痛くないの？」

珍しくしおらしい少女の言動に、俺は奇妙な気分陥った。

「らしくない言葉掛けるんじゃないよ。ホント、らしくない……」
ちよつと照れくさい自分がそこに居た。

そこから、少し行くと、今度は、通路と呼ぶのか？と言えるような、床が岩のように凸凹したところに出た。

「これを歩くのは大変ね……」

「でも歩くしかないんだろ？キミの持論で行く？」

ちよつとジョークのつもりで言ったのだが、少女はプクツと膨れっ面をした。判りづらい奴だと思ったが、ま、気にせず二人とも先を急ぐ。

と、途中の岩を越えようとした時、踏んではならない場所だったのか、後方から、ゴゴゴーと言う音と共に、土砂崩れのような砂が俺達目掛けて押し寄せてきた。

「逃げるぞ、逃げ！」

先に進んでいる少女のお尻を押した！

「エッチ！」

「んな事言ってる場合じゃ無いつつーの！良いから逃げ！死ぬぞ！」

少女は後方を見てやっと把握したらしい、一目散に、岩を駆け上り、そして、駆け下りた。俺達はそれを繰り返し、最後の岩を越えた。その岩は、この通路の天井ギリギリまで高さが有り、それを超えるのには背中とお腹が引っ付くかと思っただが、危険が後ろから迫っていたため、苦にはならない。その代わり、その岩を越えた瞬間ドツと疲れが出た。二人して、背後の岩にぶち当たるドーンという

音を聴きながら、岩にもたれかかり、ハアハアと息を付いていたのである。

「凄い仕掛けがあったものだ……死ぬかと思った……」
息継ぎしながら俺は冷汗を拭った。

「まだこんな事が有るの？もう沢山だわ……」

流石に少女も根を上げかけた。が、スクツと立ち上がると。

「さあゝ行くわよ！」

何も懲りてはいないらしい。まあ、どちらにしても、背後がこれじゃ、戻るに戻れない。進むしかないのだ。

そこから先は、お決まりのような罠が仕掛けられていた。石畳を踏むたび矢が飛んでくるは、水が押し寄せてくるは……しかし俺達は何とかそれを掻い潜り、罠から命からがら逃れることが出来たのである。

そして進んだ先の通路の突き当たりで終に、地下への階段。というのか……実際にはそこに通じる穴を見つける事が出来た。

「これは、此処を下りろ。と言う事なのだろうか？」

「それしか無いんじゃない？でも、この穴、どうなっているのかしら？」

そう、底が見えない分、空恐ろしい。でも、声が此処から聴こえて来る事だけは確かだ。

「ロープが有れば良いんだけど……」

そう考えてみても、有るはずが無い。

「それじゃあ、先に私が下りてみる。あなたは後から来る？」

はあ。何故こんなに仕切れるのか？

「いや、俺が先に行く。キミは、俺が良いというまでそこに待機してくれないか？」

こういつときのレディーファーストは間違いだ。危険を伴うなら、俺が先だろう。そう思う。

「俺が下で呼んだら降りてきて良いから。気をつけるよ！」

「あゝら。格好つけちゃって。良いわ。此処はあなたに譲るから」
そう言って少女はクスツと笑った。それは、心から笑ってくれたように感じられて、不快な気分にはならなかった。

「じゃあ、行くよ!」

そう言い残して俺はその穴に脚を入れて中に入った。入ったは良いが、足元が滑る。気を付けながら、足を踏ん張ったが、終に滑ってしまった。

「うわっ!」

ズルッと滑った足は、俺の体重を乗せてそのまま地下へとそのまま落ちていったのである。

「うわ~~~~~っ!」

と落ちた先は、真つ暗な何もわからない場所だった。此処が地下? ドシンとお尻から落ちた俺はその痛んだ箇所を擦りながら、回りを観察した。

「ね~~~~大丈夫~~~~!」

遥か頭上から、少女の問い掛けが聴こえた。

「ああ、着いたよ! キミも降りておいでよ! ちゃんと受け止めるから~~~~!」

頭上の少しだけ明るく見えるところが穴なのだろうと俺は把握し、そう叫んだ。

すると暫くして、

「きや~~~~~っ」

反響する声が穴から近づいてきて、そして、スポンと落ちてきた少女の仄かな光を頼りにタイミングを掴んで抱き留めた。が、少し失敗して、よろけて腰から床に落ちてしまった。情けないことである。

「あら、上手く抱きとめること出来なかったわね?」

あっけらかんと言ったのけた少女は、その後お腹を抱えて笑っていた。

「どうも。無様で悪かったな!」

「いえいえ。ちゃんと抱きとめて貰えて助かったわよ！」

それでも少女はケタケタと笑っている。

「もう、そんなに笑うなよ……それより、早く宝石を見つけないといけないんじゃないか？そろそろ夜が明けるぞ？」

「それもそうね。急がないと！」

夜が明けるのと同時にこのお城は無くなるのだった。それを忘れる所だった。俺達は……

#4 そして、また来年。

「何処から聴こえて来る？あの声は……」

俺達の仄かな光で何とか周りが見えてきた。

中世の鎧が何体も並んでいるこの地下。薄らぼんやりの明かりの下、それが今にも動き出しそうで不気味に感じる。

「こつちよ！」

少女は耳元に手を持ってゆき、的確にその声が聴こえる方角を指差した。そして、俺達は進んでゆく。

此処には、罨は無いようだ。有るのは、あの言霊。そして、終にあの言霊がはつきりと聴こえる場所に到着した。

そこは、アーチ状の石が積まれた部屋だった。ドアを開けると、中央に、石段があった。その上に、透明なガラスケースで覆われた七色に光る石らしき物が見える。

「あれね！」

少女は、我先にと言った感じでそこへと進んでいく。

「おい！気をつけるよ！」

俺は嗜めるように言った。少し気になる。確かに此処に来るまでに色々な罨が有った。が、地下に来た途端パタツと無くなったのである。此処に来て何か有るかもしれないと思ったからだった。

少女がガラスケースを持ち上げたその瞬間。悲鳴にも似た声が劈いた。それが言霊の声だと、判った。

俺達は、耳を塞ぎその声を遮断するしかなかった。微妙にだが、この地下自体が揺れている。頭上から、埃やら砂やらがパラパラと落ちてきた。

「ケースを閉める！」

俺は叫んだ。少女は、言われた通りそのケースを宝石の上に被せた。すると、揺れや劈くような声は収まった。

「どうすれば良いのよ！」

少女は、此処まで来たのに！と言う風につな垂れた。

「何かこれを解く鍵は無いのか？」

「判らないわよ！」

結局どうすれば良いのか？俺達には判らない。暫く俺達は黙ったまま石段の上のケース前で立ち尽くしていた。

「俺達が此処に来た理由、それは、自分が何なのか？それを知るためだったよな？」

原点に戻るつもりで俺はそう言った。

「そうよ。あなたが言い出したことじゃない！私は、あなたに付き添っただけ。興味が無い訳じゃなかったからね。好奇心よ！」

「付き添った？好奇心？それが問題なのかも……」

俺は、心を改めて今度は自分でそのケースを持ち上げた。すると、

「汝、光に属する者か？それとも闇か？」

声は、そう問いかけてきた。悲鳴も揺れも起こらなかった。

「そんなことは判らない。俺は、自分が何なのか？それが知りたいだけだ！」

「……ならその宝石を取りたまえ。そして、最上階に行くのだ。そこで全てが明らかとなるだろう」

消え入る声に慌てて、

「ちよつと待つてくれ？この少女も一緒をお願いしたい。彼女も、自分が誰なのか？判らないんだ！」

「お前が望むなら、それもよし。さあ行け！自らの宿命を持ちし者よ！」

今度こそ声は聴こえなくなった。言霊さえも聴こえないシーンと静まり返ったこの場所。俺は言われたとおり七色に光る宝石を手にとった。

次の瞬間、俺と少女を一纏めに取り巻くようにシャボン玉のような光が身体を覆った。

「うわっ！」

「きゃあっ！」

気が付いたら、その光の中に閉じ込められて上昇していく。天井まで届いた時、ぶつかると思ったが、その光はその天井を貫き、そして、さらに上層へと突き進んでいく。

気持ち悪いと思った。が、暫くすると高速で浮上していく為、景色はオーロラのようにキラキラと煌いている。さっきまでの不快感は無くなった。

「これ！何処まで行くのよー！」

「最上階だろ！キミも来れて良かったよ！」

「悪かったわね！お荷物で！」

「荷物だ何て思っていないよ！もっと素直になれないのかキミは！」

「これが私の性分なの！」

そんな会話もあと僅かかと思うと、何てことは無い。可愛いじゃれ合いだったなと思う。

そう楽しかった。

こうして会話できて、旅が出来て……

だから、

「ありがとう」

と照れながら呟いた。

「うわっ！何なの？それ！背中がかゆくなっちゃうー！」

「何とでも言え！」

少女はケラケラと笑っていた。俺も思わずプツと噴き出した。そして、俺達は終に最上階へと到着した。

最上階は、光の渦であった。地下とは正反対だった。真っ白な世界。目の前が眩しくて、これはこれで目を開けていられない。俺達は、

目を凝らしながら、何処に王冠が有るのか？それを探した。

「ちよと！何処に居るのよ？手でも繋がないと判らないじゃない！」

その言葉に、薄っすらと影らしいものが見えるそれを触った。少

女の細い肩だった。

「手、繋ごう！俺は此処だよ？」

俺達は少女の手を探り、少女も自ら差し出し手を繋ぎ、そして二人で王冠を探した。

この光の中だと、物と言う物に影が出来るのではなからうか？そう思い目を凝らす。

そして、歩き回る。何処がどこなのか？それさえも判らない。でも、歩き回る。ただ、少女の手の温もりだけを感じて。

「ねえ、今幽かなんだけど、あそこに何か見えた！」

少女は、俺の手をギュツと掴んでそう言った。

「何処？」

「ちよつと後ろに戻つて？ほらあそこ！」

確かに何かがあるように思える。白い光の溢れるこの最上階に、一点の曇りが見えた。

「王冠つて、黒い墨みたいな物なのか？」

「知らないわよ……でも、あれじゃ無い？そうとしか考えられないじゃない？」

俺達は、そこに向かう事にした。

近づいてくる影。それは、だんだん王冠の形に作られて、確かにそれが王冠なのだと二人して悟り、手を繋いだまま走り出した。

目の前には、大理石のようにすべすべした石の上に古びた金属と言うには程遠い、木の王冠があった。何とこの七色の宝石に似つかわしくない王冠。

「ほら、見つけたんだから、さつさと嵌める！多分この窪んだ所だと思っわよ？」

王冠の前頭部にそれらしい穴が有る。俺はそこに手に握っている七色の宝石を当てはめようとした。が、途中で少女の逆の手を取り、

「一緒に嵌めよう？」

と言った。此処まで来れたのも少女が居たおかげだ。だから、俺

はそう言った。

「全くこれだからロマンチストは……」

「悪かったね？」

俺はそれでも一緒に行いたかった。

「これで最後よね？ 私達、多分離れ離れになるわ？ でも、あなたの事ちゃんと覚えているからね？」

「そう言ってくれると思ったよ？ 俺も忘れない……」

そして、スツと王冠に宝石を埋め込んだ。

その瞬間、辺りは星空に変わった。

そして、俺の思考に割り込む映像。

月が……あの青白い名を忘れた月が俺を見下ろしていた。

「此処にお帰り。キミは月が流した涙。本来此処に居なければなら
ない存在。満月の夜に零れ落ちた欠片。だから、早くお帰り……」
星が瞬いている。月が俺にそう言っている。

「俺は、月だったのか……」

思い出した。毎夜この地上を見下ろしていた月。そして、彼女は
……月下美人。

夜にだけ咲くサボテン科の花。真っ白で美しく華やかな花。

この、晩夏に、ただ会いたくて俺は涙を流し、地上へと降り立っ
た。俺は、彼女に恋をした。そうだった。

「ただ会いたかったんだ……」

太陽が東の空から昇る。

今帰らなければ帰る事が出来ない。俺は、白んでくる空に浮かん
だまま地上を見た。少女が俺に手を振っていた。声は聴こえないが、
唇が描いたそれは、

「また来年会いましょう。お月様？」

少女はスツと消え去った。お城ももう、無い。

「また来年。会おう？ か……」

俺は、フツと笑い、そして、ドンドンと上昇した。

太陽の光が、俺の姿を消していく。

「俺は太陽の光で存在をあらわに出来る月。影の存在。でも、姿は見える。そして、ちゃんと此処に居る」

ぼやけた思考の中、俺は本体である月と同化した。

闇は、光に憧れて、光は闇を宥めるが、その先には空と海のように交わらない」

何故かこの言霊が頭に流れる。だけど、それは心で打ち消した。
また来年、彼女に会えることを切実に祈りながら……

#4　そして、また来年。（後書き）

最後まで読んでいただき有難うございます。

簡単なお話でしたが、正体は、月と月下美人でした。

人間だけでは無い、この世の物に生命を吹き込んだ。

そんなお話を書いて見たかったので、書いた作品でした。次は、占夢者でお会いいたしましょう^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9650d/>

永久の光 ～失くした記憶～

2010年10月8日15時33分発行